問屋センターにテニスコート誕生

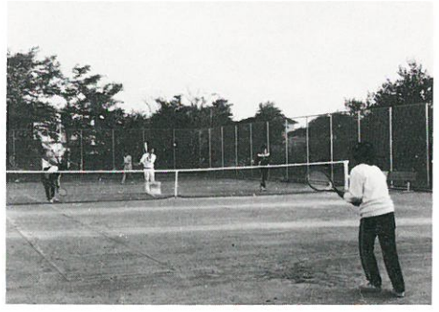
金沢問屋センターテニス同好会世話人
東和工業㈱　佐　藤　昭　典

問屋センターには福利厚生の施設として、野球場しかなく、かねがねテニスコートの設置の要望がありました。敷地は金沢市に寄付した桜公園、子供プール・芝生公園第二団地空地等、テニスコートの適地はあちこちにあり、常々理事会の話題となっていました。昨年の春市当局へ強力に働きかけ、漸く桜公園の場所に市の予算でクレーコート１面が昨年の秋完成致しました。然し利用方法につき、市当局とセンター側との間に食い違いもあり、又コート附属施設もなく、使用するには色々問題がありました。漸く今年春、市との折合がつき、問屋センターの予算で施設仕切ネット、水道施設、トンボ、ブラシ、ネット等の用具を支出して頂き、漸く夏過ぎより使用出来るようになりました。そしてテニスをやってみたいという社員の希望をとってみたところ、100名以上となりました。あらためて、テニスブームの有様に驚きました。そして正式に今後の用具の補充費とするための会費を徴収し、テニス部が発足致しました。幸い初心者と中級者が大体半々となりましたので、申込のあった各社宛週間割振りを行い、初心者には週一回教室も開かれ、現在に至っております。

このコートはあく迄も、市の施設であり、附近民より申込があれば開放してやらなければなりません。然し施設がセンター内にあり、又運営をセンターにまかされているものですから、大体常時使用出来ると思います。発足して１ヶ月余、最近の夕方の使用となりますと、夕闇が迫り、発足がおそすぎた感じは否めません。然し日曜日はフリーとなっていますから、充分利用できると思います。コートは利用しないと、雑草の生い茂るままとなる憂いがあります。センター内の各社の皆様方は、週休二日制の一日を、テニスのボールを追ってみては如何なものでしょうか。

テニスの時間当り、カロリー消費量は、縄飛びについでおり、実にゴルフの10倍だと言われています。肥り過ぎ防止、体力維持には最適のスポーツと言われています。現に早朝の兼六園コートは60才以上のテニス愛好者でコートの大半を占領しています。最高年齢者は80才をこえていると聞いています。決して無理なボールを追わず、自分の体力を考えた悠々たるテニスを行っています。若い方は勿論の事、中年、いや初老を過ぎた方でも、おそ過ぎる事は決してありません。今年は無理として、来春よりあらためてテニス部員になって下さい。センター内にコートの適地がまだまだあります。中年以上の方の希望が多ければ、中年のテニス教室も考えています。愛好者が増加すれば、もう一面も働きかける事も可能ですし、又業務後行うとすれば、ナイター施設にして、初めて社員の真のレクリェーションになります。

業務終了後に一汗流し、家に帰り喉の渇きをビールで癒すのも、又格別ではないでしょうか。



森佐㈱初優勝!!

第14回商社対抗野球

第14回商社対抗野球大会は、35チームの参加により、５月11日より、問屋センター球場を会場に早朝６時から、開催されましたが、去る８月８日、森佐㈱対丸与商事㈱との間で決勝戦が行われ、過去８回優勝の実績をもつ強豪丸与商事に対して、森佐を主力とする北島、斉田ベビーの３社連合チームは、攻守共によくまとまり、特にピッチャー岩佐選手が好投、相手チームを最少得点におさえ、初優勝を飾りました。

《試合結果》

準々決勝　寿商会11－５明希　丸与商事８－１北日商事
　　北陸通信３－２石繊　森佐８－１石川東芝
準決勝　丸与商事12－０寿商事　森佐２－１北陸通信
決　勝　森佐３－１丸与商事

《成　績》

優勝：森佐㈱　準優勝：丸与商事㈱
第３位：㈱寿商会・北陸通信工業㈱
最高殊勲選手賞：森佐・岩佐選手
敢　闘　賞　：丸与・中村選手
打　撃　賞　：斉田ベビー・広瀬選手

ソフトボール大会開催

第７回ソフトボール大会は、38チームの参加により、９月13日、問屋センター球場で開催された。前日、悪天候の為、心配されましたが、当日は好天に恵まれ、早朝６時より四面を使用し熱戦を展開、５試合を勝ち進んだ共栄電機㈱が優勝を飾った。結果は次の通り。

優　勝　共栄電機㈱
準優勝　石川東芝商品販売㈱
第三位　小川㈱
〃　石川東芝住設機器㈱
最高殊勲選手賞：共栄・西島選手
敢　闘　賞　：東芝・原　選手
打　撃　賞　：共栄・森木選手

協同組合 金沢問屋センター

第20号　１９８１年11月発行
協同組合　金沢問屋センター
発行者　小川甚次郎
金沢市問屋町１丁目
電話　３７－８５８５

〈新駐車場〉

協同組合事業委員会の現況と将来の展望

事業委員長　冨木　昭光

まず現状をお話し申し上げる前に、現在に至る迄の経過を簡略に説明し、参考に供したいと思います。

協同組合金沢問屋センター“十年の歩み”をご高覧頂ければ、よくお解りの事と存じますが、問屋センターが誕生した一年後から発展の時代に入り、昭和43年５月委員会組織が改組され、六つの委員会が発足しました。その当時の事業委員長は現理事長の小川甚次郎氏であります。事業の一環として、総合見本市の推進を基盤にされてこられたようです。昭和45年には、小川三郎氏が委員長になり、大体基盤固めをされ、現在に至っております。

更に昭和50年８月には、事業委員会の所管事項が、下記のように再確認されております。

(1)組合事業の普及に関すること。
(2)共同の施設及び、事業計画の運営管理に関すること。
(3)組合員の共同事業参加促進に関すること。
(4)新年互礼会、経営者研究会に関すること。

以上であります。

具体的には　①共同運送（トナミ運輸・仲使い）、共同倉庫利用、②会館、駐車場の利用、③共同展示場の利用、④新年互礼会、経営者研修会等であります。特に経営者研修会につきましては、中央よりＮＨＫの解説委員長をはじめ高名著名の方を講師に呼ばれ非常に好評でした。51年の改選で不肖、私が事業委員長を拝命しました。大物委員長の後をうけてどのように運営したらと思慮してみましたが、中々よい案が浮かびません。ただ基本的に協同組合の事業としては、いかにあるべきかを考えてみました。

まず、卸商団地の役割として何よりも、集団化のメリットがあげられます。次いで販売の協同化でありますが、繊維業界は可能の面もあるが、百貨の方はなかなかまとまらない場合が多い。一方、スペースがあるので何か共同仕入の事業が考えられないかも思索してみましたが、結果的に各企業の経営合理化で、経費面の支出を集団メリットによって抑制することを、当面の課題として、取りあげざるを得ませんでした。近代化研究会で積重ねて来た、ガソリンの共同購入を事業委員会が、担当することにもなりました。色々問題もありましたが、問屋センターがプライスリーダーの立場になっていることは特筆すべき事であります。何度か危機が到来しましたが、組合員の方々の絶大なるご支援のもと、共同と連帯の思想が滲透し、心の支えになっている事を感謝する次第であります。一方、共同運送につきましても、わずかながらでも利用者還元の原則が維持出来る事も、ご同慶の至りであります。又高速道路利用につきましても、順次利用状況の好転に伴い、組合事業として、又組合員に還元も出来、喜ばしい限りであります。

問屋センターも完成後15年も経過すると各社の経営規模の拡大に伴い、車輛も一段と増加し、共同駐車場も従来のままでは間に合わなくなり、新らたに借地して増設したが、それも殆んど満車で、全くうれしい悲鳴という現況であります。この駐車場利用収入は、組合運営の最大の収入源となっており、貢献するところ大なるものがあると信じます。

時代と共に変って行くことは当然でありますが、現在の運営は次の如きものになっております。

①組合事業の普及　②共同施設と事業の企画運営　③組合員の共同事業参加の促進　④経営者研究会などに関することというように変化してまいりました。

今後の組合運営を考える時、総合的見地からのビジョンのもと、その一環として共同事業をとらえねばならないと思いますが、私見を述べさせて頂きます。

従来、協同組合と組合員である、企業との共存の意味で、財政支出のディフェンスという意味のとらえ方から、共同事業を推進して来た次第ですが、もっと日常的な中でという事で、海浜道路の利用料金の割引を、県と折衝しておりますが色々問題もあり、高速道路並に、ゆかないようですが、粘り強く交渉してみたいと思っております。警備保障(機械警備)な問題も、従来から検討されておりますが、共同加入ということで、合理化につながれば幸と存じます。また、中々至難の問題で、途中で挫折しておりますが、建物及び、車輛の保険が取り上げられれば、多大の収入源となるものと信じます。すべて組合員の深いご理解と、ご協力が得られなければ、推進は至難と思われます。

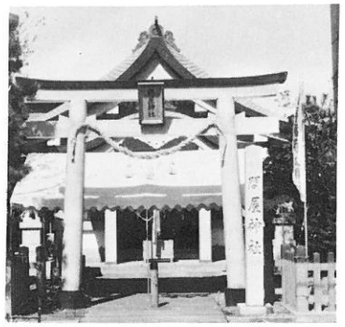
今後の積極的推進事業としては　①組合員の共同展示斡せん　②組合員同志の共同受注の推進　③組合員間の売残り商品の売買処理等があげられるでしょう。厳しい経済環境下、大いに検討すべき問題でないかと考える次第です。教育情報事業については、経営者研修会という事で、出来るだけ実践家の意見を聞き、情報化時代の対応に即すべき会を、大いに開きたいと考えておりますので、出来るだけ多くの参加を希望致します。

殊にメカトロ複合化時代における、発想の転換こそ望まれるので、大いに勉強すべきであると思います。現実にコンピューター利用の考え方等も学び、経営に生かして頂けるならば、幸いと考えております。

委員の方々の叡知を結集しなければなりませんが、今後大いに組合を利用することこそ、各企業の隆盛と共に、組合の発展につながるものと確信致します。

問屋神社雑感

問屋神社宮司　本嶋千加良



問屋神社

伏見稲荷大社

去る十月三日に「問屋神社」御鎮座十周年祭を、石川県神社庁・伏見稲荷大社からの参列のもと、無事にしかも盛大裡に、御奉仕させていただきまして、誠に有難うございます。これもひとえに皆様の御尽力の、賜ものと感謝いたしております。

さて、十周年と申しましても、実は当「問屋神社」は、(以下当社と省略)昭和四十五年十月五日に、「伏見稲荷大社」の御分霊を勧請して、御鎮座を夕闇の中で、厳粛に御奉仕され、翌六日、七・八日の三日間に渡って、秋季例大祭並びに、鎮座記念慶賀祭を斎行いたしました。以上のことから当社の例祭日を、十月五日とし、春季例祭日も四月五日とし、新年祭を一月四日と決定をいたしましてから、当社を宗教法人法に従った神社として、設立認可を受けるべく、事務処理後、翌年二月に、正式に認可されました。このことから、本年が当社創建ならびに、宗教法人「問屋神社」認可、満十年にあたるわけでございます。以上のことを、昨年の秋季例祭終了後、当社責任役員に、御協議いたしましたところ、是非とも、先に述べました御来賓の参列のもと、記念大祭を執行するとともに、子供神輿買入等に意見がまとまり、本年になりまして、各位様に、御協力を申しあげましたところ心よく御拠出金をさしだされまして、誠にありがたく感謝にたえません。

今後は、皆様の益々の御繁栄をお祈り申しあげますとともに、当社の弥栄を祈念しておりましたところ、先日センターの広報委員会より、一つ神社について書いてほしいと云われまして、皆様に御礼を申しあげますとともに、当社の御本社であります伏見稲荷大社の御由緒と、当金沢問屋センター周辺のことについて、述べさせていただきます。

先づ最初に、「大社」の創建のいわれとして、山城風土記に次のような伝説を載せている。

秦中家忌寸らの遠祖秦公伊呂具は富者であった。あるとき、餅を的として矢を射たところ、餅が白鳥となって飛びかけり、三が峰の山上に止りそこに稲が生じた。不思議に思った伊呂具が、そこへ神社を建て、伊奈利社と名づけた。

これが、稲荷神社創建のいわれで、二十二社註式ではこれを和同四年のこととする。稲生がイナリとなったのだが、イナリに稲荷をあてるのは、角鹿が敦賀となったように、ｎとｒとが転音する一例である。

稲荷神社にある古い神影では、老翁が稲束を肩に荷った姿を描いているが、これはむしろ稲荷の字からの連想であろう。

初め伊呂具が祭ったのは、山上の社殿で、秦氏の祖神であろうが、稲荷の語から穀物の神である倉稲魂神が主祭神となり、山上の祭神を猿田彦命、山中を倉稲魂神、山下を大宮女命とし、上社・中社・下社の三社三座と唱えた。猿田彦命は道開きの神で、神像を描くときは赤顔の天狗とする。大宮女命は調和の神である。上中下の山というのは、三が峰のことで、稲荷山の中復にあたり、三社はそれぞれ200mばかりの距離にある。この神域は奥の院と称され、現在は神苑で、各所に赤い鳥居が立ち、また本殿からこの奥の院に通じる道は、俗に千本鳥居といって鳥居がトンネル状に並立している。

なお今年六月に、有志による伏見稲荷大社参拝の際に、感激された各位が御芳志を拠出し、又、その他の方々からも助成された御芳志によって、鳥居を壱基奉納しております。

いま御本殿のある敷地に、御社殿が営まれたのは、弘仁七年(816)に空海の奏請による建立とされ、空海は稲荷の神を、教王護国寺の鎮守とした。御本殿に奥三社の神を、合祀したのであるが、のちに摂社田中神、四大神を相殿に加え、平安時代後期には稲荷五社大明神と呼ばれた。なお、稲荷山全体の地主神を荷田の神という。

天慶五年(942)に正一位に進み、のち二十二社のうちの上七社のうちに列した。

次に、大社の年中行事は沢山ある中で、初午祭は特に著名で、この日の参詣を稲荷詣といい、古来貴賤の参詣が多く、農民も豊穣を願って参集したが、また商売繁昌を願って商人特に水商売の人達がこぞって参詣する。

稲荷信仰には、神木である杉と、神使である狐が有名である。この神に祈るものは、杉の木を植えて成育すれば吉、枯れれば凶とされ、詣でるものは、神域の杉を折りかざして、家に帰える風習があり、これを『験の杉』といった。また神仏習合思想から、稲荷神は仏教の吁枳尼天とされ、招福除災・財富蓄積の神となって、全国に分祀社約三万五千といわれ、分祀社の多いこと、神社うちの第一とされる。伏見稲荷大社に、祐徳稲荷神社(佐賀県)笠間稲荷神社(茨城県)を加えて、俗に三大稲荷という。

神社ではないが、愛知県豊川市の豊川稲荷は妙厳寺という寺院で、吁枳尼天を祭る。この豊川稲荷を、現在でも多くの人は、神社であると思っていらっしゃるかたが多いのですが、今後は、是非おまちがいのないように、御注意下さいますようお願い申しあげます。

さて、次にここ金沢問屋センターの所在地についての略歴を述べてみます。(以下金沢問屋センターをセンターとする)

センター設立についてから、現在に至る歴史は、組合員であります各位様には、御承知のことですから省略いたしまして、それ以前についてです。

皆様は鞍月ということばから連想されるのは、鞍月小学校の校下のことと思われるかもしれませんが、、実は、江戸時代には、南は安江町、北は蚊爪、東は諸江、西は粟崎以上が石川郡の鞍月庄という行政グループの中であり、浅野川を隔てた河北郡も、東は高柳、西は浅の川、南は沖、北は東蚊爪という昔の村名(字で申しますと、29ヶ村であったということです。)これを今、現在の地図に、あててみましても、大変な広大であることがおわかりいただけるかと思います。江戸時代、この地域の総高は、約二万三千石もあったそうです。

なお、南は安江とあるのは、現在では推定するだけですが、金沢駅から武蔵ヶ辻界隈である。

この広大区域の中心地に、センターが造成されたわけです。センター用地内に買収された地域内の地主神として、古記録からみますと、割出地区には木舟神社、住吉神社、直江地区には八幡神社、諸江下丁地区には白山神社、三口地区には八幡神社があり、現在まで続いている神社は、割出地区の木船神社以外の神社すべてが存続している。

では、木船神社はどうなったかと申しますと、江戸末期から明治の初期に合祀されて、現在に至っております。それでは、現在のどのあたりかと申しますと、問屋町２丁目地内を流れる割出川沿いにあったそうです。

次に、このあたりの歴史としては、縄文晩期に近岡・戸水に、弥生時代には近岡・南新保に、奈良時代には東蚊爪・千田が、平安時代には近岡・戸水・御供田が、鎌倉時代には、近岡・戸水・南新保・沖、室町時代には割出・諸江・大河端・松寺・近岡・東蚊爪・千田・磯部・戸水・南新保・木越等々の地名が各文書ならびに遺跡、遺物の発見されたところとして、散見している。

就中、室町時代から、つい最近まで続いた高桑氏は、戦国時代に割出町を本拠とし、高桑五郎備後守と唱え、勢威を振ったといわれ、現在でも、割出町地内には、高桑氏に関係する館跡や、地内が沢山ある。

なお、私の本務社は「須岐神社」と申しますが、伝えられる由緒では、元正天皇の霊亀二年に、当時河北郡を加賀郡と云っていましたが、加賀郡の赤浜の地に鎮座し、更に数年後に八幡神社を勧請して、赤浜八幡宮と称え、両神社の神職として御奉仕しておりますが、途中種々の出来事等により、類代数も判別しませんが、かの一向一揆のおこった長享二年に死亡した、須賀麻呂を中興の祖として、私で二十三代となっております。

又、須岐神社の境内地は最盛期には、境内地参千坪、神主宅地五百坪、神事用川原神事浜五十坪、この他に神饌田として正月田・三月田・六月田・八月田等があり、境内末社として十社、境内外末社として五十社あったと伝えられ「赤浜神主」と呼ばれていたので、現在でも各町の御老人からは、赤浜の神主さんと呼ばれている。

金沢市の再開発計画

—宇野邦夫市議を囲んで—

近代化研究会定例会

近代化研究会では、10月定例会に当組合顧問市会議員宇野邦夫氏を講師に迎え、市政について話を聞く機会を得た。

≪要旨≫

市政全般にたずさわって、丸６年の経過から、今後市の行政の中で何をとらえていけばいいのか、現在、建設委員の立場から金沢市の再開発に的を絞って話をしたい。先ず金沢の開発の現状は、香林坊から片町、武蔵周辺、駅周辺の現市街地の再開発と、新しい街造りを目指す駅西地区の２点であろう。武蔵を中心とした開発は、市が全面的に直接介入しており、第一、第二、第三街区と周辺は開発されつつあるが、武蔵から金沢駅の間の開発については、計画そのものが景気の良い時の案で、その後のオイルショックや、国の財政の問題等で費用が増大、例えば、面的開発のビルの目的、道路活用、地域の開発に参加する人達の、地区外移転等で、約300億の事業費が見込まれ、この見直しが必要になってきているのが実情であり、難しい局面を迎えているが、駅から武蔵間を放置しておくことはできない。早急な具体案と策が必要である。

一方、香林坊、片町側から観ると、市の行政は武蔵周辺ばかりに気が廻っているのではないかとの意見もあるが、こちらは第一街区は市、第二街区は県が行政上の責任分担をしている。第一街区の鞍月用水上の商店の撤去は90%完了し、10%を残すのみとなっている。第一街区の再開発着工は、来年の春から夏にかけて、キーテナントは東急で市が介入し、第二街区の開発は大和がキーテナントで県が介入する。第二街区のそれは県サイドの見せどころとも言える。ところで市の行政はこの地域の商店に対してどんな施しをしているのか。例えば、片町アーケードの新装工事をしているが、２年間で5000万円という助成融資制度等もその一つである。

さて、香林坊、片町から武蔵、駅周辺の新しい街づくり、そして駅西地区の副都心づくりをやろうという力は問屋センターが出来たからこそ、この周辺も栄えてきたとも言える。そこで駅西の再開発に目を向けると、第一期事業で駅の裏から中央市場に約100億円投入し、第二期工事で、中央市場からバイパスまでと進められつつある。この第一期での反省点は、公共用地が非常に少ないことと、再開発のピッチが遅いことだろう。又、30億の投入をして用地を取得し、公共施設をどうはりつけるかであろう。もっと多く、もっと早くもっていきたいところだが、当面金沢市が予定している公共施設は夏、冬の水の使用状況を電算によるコントロールで、集中管理のできる企業局を近々駅西地区に、建設計画をしている。

又、58年の都市計画の見直しによって、西口駅と現駅前口、それに高架化、新幹線の問題から駅横の貨物ヤードの跡地4,000坪の使い方と、駅裏の9,000坪の利用、このような駅周辺整備の問題に始まって、駅の前と後の使い方、交通機関の利用の仕方、東と西の歩行者の回路、東の駅、西の駅、商店街のあり方、緑の空間をどうするか等いろいろ問題をかかえている。具体的には、地域の商店街を含む経済界が、基本的な用地確保（70%完了）をしている土地と、貨物ヤード跡地13,000坪を、どう利用していくかである。62年から63年にかけて高架化が進められ、59年には中橋陸橋を2.5年の予定で落す。これは列車を止めずに行う工法、手法に大変興味があるが別に中橋陸橋近くに寺が二軒あって、墓地の移転の問題もでており難しいところである。そしてそれにともなって東金沢寄に２～３本のう回路線が、当然必要となってくる。

ここで都市計画回路にもふれてみたい。金沢市内の重要な街路線は３路線である。①観音～湧波線、②小立野～古府線、③森山～有松線（60～62～63年開通）、それに外廻り環状線の野々市～新庄～豊国は、別に金沢大学の移転の問題とも切っても切れない重要な線で、開発と同時に路線も平行して考えなければならない。しかしこの開発の裏には、保存ということも重要視すべき問題である。そこで旧市内の保存はどうなっているのか。例えば●寺町の土塀には50%以上の補助金助成、●市の設計で長土塀土塀確保、●水と緑の再生計画で用水を保存する。●金沢の昔からの由緒ある町名、辻、坂を残す、●歴史の街しるべ等々。

金沢市は来年開町400年を迎える。将来に向けて400年をステップとして、どんな事業を計画してゆくか協議中であるが、計画としては、子供のため、健康な20～30代の若者のため、老人のためを考え、市全体として新しい発想で推めている。１～２の具体的な案として、子供の開拓精神を旺盛にするため、山を買って開拓村を造る。あるいは文化ホールの建設等。

今後の金沢市の発展のため、開発と保存の二面から金沢市の再開発計画を探ってみた。

第９回社員園遊会盛大に開催

秋もたけなわ、第９回金沢問屋センター社員園遊会は、10月３日㈯晴天にめぐまれた問屋センターＡ公園を中心に、立横通りを歩行者天国として、団地内商社員はもとより、話しを聞いてかけつけた主婦、子供達でにぎわった。

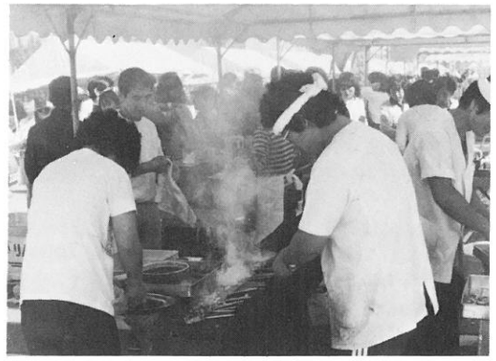
当日は、各商社より格安の商品販売大会が行なわれ、各テントでは、繊維・雑貨・スポーツ用品・履物・玩具等超格安で提供、公園では、高島易断による無料手相鑑定、又会館前では、石川県肢体不自由児協会チャリテー輪投大会など、もりだくさんの企画に日頃の仕事をわすれて、笑い声と雑踏の楽しい一日でした。

又当日は、問屋神社の祭礼にあたり、青のハッピに身をかためた、子供連40余名による大鼓行列もにぎやかにくり出し、祭り演出も効果満点であった。

オッサン！ おつり80円

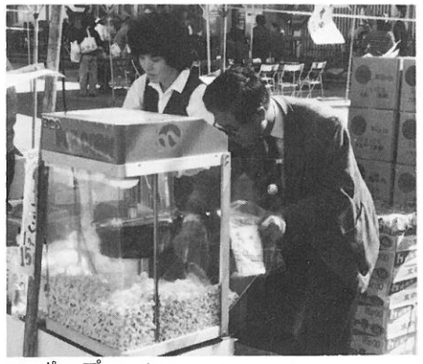
さあ出発！元気にいこうぜ

ウーン！ うまくいっとるね



やきとり販売

チャリテー輪なげ
技術じゃないよ　心だよ



ポップコーン
袋に１パイ　サービスサービス